

## 令和5年度未来を創る学力向上支援事業に係る未来を創る授業力向上協議会(小国語)

【目的】 各小学校及び義務教育学校前期課程の教員等を対象に、学習指導要領の趣旨を踏まえた授業づくり及び授業改善に関する講義・説明等を行うことにより、小学校教員の指導力向上を図り、もって児童の学力向上に資する。

【期日】 令和5年6月30日(金) 13:30～16:25

【場所】 ホルトホール大分 大会議室

### (1) 開会行事

#### ○大分県教育委員会あいさつ

課長 小野 勇一

- ・学習指導要領実施4年目。各学校でどのように授業改善を進めているか。
- ・県調査の結果からは、領域によって力の定着に差があること、「国語の勉強か好きか」の数値が徐々に下がってきていることなどの実態がある。
- ・今年度はR6年から使用する教科書の採択年度。児童が主体的に取り組む工夫やICTの活用が新しい教科書に盛り込まれている。県の教育センターでは通年展示しているので、ぜひ見て欲しい。

### (2) 行政説明及び協議

#### 「大分県の小学校国語科の課題と授業改善」

〈説明者〉大分県教育庁義務教育課 指導主事 瀧口 忍

- 「話すこと・聞くこと」で全国平均を下回る。
- 話す聞く力は国語科の中で、手段となり、目的となるもの。(他教科においても手段となるものであり、国語科で育成することは重要)
- 全国調査の問題を取り上げた考察  
(問題の区別)  
「互いの立場や意図を明確にしながらかつ計画的に話し合い、自分の考えをまとめることができるかどうかみる問題」
  - ・無回答率が3%であることから、児童は何らかの答えを書いている。
  - ・誤答例から何が足りないのか、なぜ子どもたちはこのように答えたかを考える。  
→話し合いの目的を十分に理解できていない。
- 授業改善に向けて  
(例)話し合う意図の明確化  
実態に応じた手立ての検討、多様な話形  
「話すこと・聞くこと」(資質・能力)≠課題解決のために話し合うこと(手立て)
- 言語活動とは、「話すこと・聞くこと」や「書くこと」「読むこと」に関する基本的な国語の力を定着させるための、言葉によって理解し思考し表現するという過程を経る活動のこと。  
※指導事項と言語活動を往還させ、つけたい力に最適な言語活動の設定をする。

### 【協議】

「資質・能力を確実に育成するための授業を構想する」

- 準備された資料(令和2年度全国学力調査問題)を教材として授業づくりを行う。
- 授業改善を進めるために以下について考える。
  - ・児童の実態を把握する
  - ・育成を目指す資質・能力を明確にする
  - ・適切な言語活動を設定する
  - ・資質・能力の定着を確認する適切な評価規準を設定する
  - ・支援を要する児童に対する手立てを工夫する

### (3) 講義「小学校国語科における資質・能力の育成に向けた学習評価の充実」

<講師> 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官

国立教育政策研究所 教育課程調査官・学力調査官 大塚 健太郎 氏

○なぜ、学習指導要領が「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理されたのか。

・日本の人口の推移予測から

→子ども自身が多様な世代との関わりを持って生きていくことが必要になる。

知識の有用さや社会と関わりながら課題を解決していくことが求められる。

・society5.0の実現に向けた教育・人材育成に関する政策パッケージより

→子どもの興味・関心及び実態の多様化からこれまでの方法では難しい現状

18歳意識調査・・・将来の夢をもっている割合が低い。

主体的・対話的な深い学びの視点に立った授業改善を行うことで、質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けるようにすることが重要である。

・小学校国語科の目標の確認から

→「言葉による見方・考え方を働かせ」とは、児童が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉の関係を言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること。

「言語活動を通して」＝言語活動は、資質・能力を育成するための手段

×言語活動を行うことが目的となっていないか。

×教材や言語活動から単元を考えていないか。

○授業づくりの手順の確認

ステップ1 単元で取り上げる指導事項の確認

ステップ2 単元の目標と言語活動の設定

ステップ3 単元の評価規準の設定

ステップ4 単元の指導と評価の計画の決定

ステップ5 評価の実際と手立ての想定

○学習評価の改善の基本的な方向性

①児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと

②教師の指導改善につながるものにしていくこと

③これまで慣行として行われてきたことでも、必要性・妥当性が認められないものは見直していくこと

○学習評価は、日常的に実施し、子どもがPDCAを回せることが理想

○「主体的に学習に取り組む態度」の評価

・知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組の中で、自らの学習を調整しようとしているかどうかを含めて評価する。

○主体的に取り組みたくなる課題の設定について

(例) 他教科等での取り組みを視野に入れる

(例) 子どもに任せる

○試行錯誤する場面の確保

・資質・能力とあわせて、学習手段も育成する

・一人一台端末の効果的な活用

○効果的な研修の在り方

・個別の教材研究は大切だが、さらに、指導事項から単元を考える意識へ

・校内研究授業等を大切にする。(先生方で一斉に1つの授業を見ることは重要)

→単元全体の本時(1時間)であると捉える意識をもつこと

